
星夜の歌姫

暁ゆうき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

星夜の歌姫

【コード】

N2351C

【作者名】

暁ゆつき

【あらすじ】

星瞬く夜に、二人は出会った。だが……。

ある日、僕は一人で夜の海岸に来ていた。
それは何となくではあったけど、夜の海が見てみたくなっていたからである。

夜の海は不思議な美しさをもっていて、肌寒さはあるけれども居心地がよかった。

そしてその日は夜空いっばいに星が輝いていた。

それは星空の絨毯とでも呼びたくなるような、本当に素晴らしい景色だった。

僕以外には誰もいない。

この海と夜空が僕のものであるかのような錯覚さえ感じた。
静寂が支配するこの美しい場所。

しばらくそうやって海と空を眺めていた。

すると、その静寂に混じって何かが聞こえてきた。

それは歌声であった。

美しい歌声。

見渡してみたけど、当然僕の他に人の影はない。

でも、確かに歌声が聞こえる。

美しく、思わず引き寄せられる澄んだ音色。

一体どこで歌っているのだろう。

近いようで、遠くのようにもある。

僕は海の方へ身を乗り出して、岸壁の下の方を覗き込んだ。

ようやく僕は歌声の主を見つけることができた。
海岸に近い小さな岩の上に、女の人が座っている。
でも、彼女が普通の人間ではないことはすぐにわかった。

彼女は、人魚だった。

彼女は僕に気が付いていない。

水平線と空が同化する美しい夜の海で、彼女は歌っている。
どうして、こんなところに人魚がいるんだろう。

いや、それよりもどうして彼女は歌っているんだろう。

それはどこか寂しげである。

哀しみの曲なのだろうか。

それはどこか喜びに満ちている。

恋の歌なのだろうか。

僕にはわからない。

ただひとつ確かなのは、僕が彼女に魅せられてしまったということ。
と。

そう、僕は人魚に恋をしてしまったのだ。

星明りに照らされた彼女は、今まで出会ったどんな女性よりも美しく見えた。

彼女から一瞬たりとも目を離すことができない。

しかし間も無く、彼女は海に潜ってしまった。

僕はじっと待っていたけど、あの娘はそれつきり戻ってこなかった。
た。

次の日も、その次の日も、ぼくはその海岸へむかった。
でも歌声は聞こえてこなかった。
彼女の姿はない。

僕は彼女に会えることだけを願い、毎日のようにそこへ向かった。
そして、空にたくさん星が輝く夜。
彼女は歌っていた。
前に聞いたときよりも澄んだ音色で歌っていた。

僕は彼女と話がしたかった。
勇気を出して、彼女がいつも歌っている岩の近くに行こうと思っ
た。

ガードレールを乗り越え、なるべく近くへ。
不安定な足場を、岩壁にしがみつくようにして歩いていく。
額に汗をかくほど、岸壁を渡り歩くのは怖かった。

でも、おかげで、彼女との距離が縮まっていった。
もう少して、話ができる距離だ。

それなのに。
ああ、何ということだろう。
僕はうっかり、足元の大きな石を、海に蹴り落としてしまったの
だ。

静かな海に、その音は十分な音量だった。
すぐに唄が止んだ。
彼女が、こっちに気がついたのだ。
驚きとも、恐怖ともとれる表情だった。

1秒か、2秒か、わからない。
彼女はすぐに海に飛び込んでしまった。

僕は叫ぼうとした。
それで、つい、片手を思いっきり伸ばしてしまった。
体のバランスが一気に崩れた。

何が起こったのかはすぐにはわからなかった。
僕は冷たくて、暗い海に、僕は落下していたのだ。

パニックになりながらも、岩にしがみつこうと必死になった。
でも足場だった岩は結構な高さがあったのでよじ登るのは難しく、
どうにか手ごろな高さの岩を見つける他ない。

ようやく岩場に登ったときには、あまりのしんどさに何も考えられなかったほどであった。

誰かの笑い声が聞こえた。
くすくす笑っている。

見れば、あの人魚が、海面に頭を出してこっちを見ているのである。

恥ずかしさの中に何とも言えない、妙な嬉しさがこみ上げてくる。
その一方で、正直ちよつとだけムツとした。

だけど彼女は興味が湧いたらしく、岩場でへたりこむ僕に好奇心に満ちた眼差しを送っている。

その日から、人魚との恋が始まった。

どうやら彼女は星が煌く夜に唄を歌うのが好きらしく、空にたくさん
の美しい星が輝く夜だけ会うことができた。

始めは遠かった距離も、会う毎に警戒心が薄れていったのか、い

つの間にか同じ岩の上で一緒に座るようになった。

言葉は通じなかったけれど、彼女の唄を聴いているだけで僕は満足だったし、僕を見ると笑顔になる彼女を見れば、それだけで幸福な気分になった。

しばらくそうした逢瀬を続けていた。

でも、彼女は陸上で暮らすことはできないし、ぼくも海で生活することはできない。

それは初めからわかりきっていたこと。

それなのに、この問題がどれだけ恨めしかったことだろう。

一年程経って。

別れの日がやってきた。

彼女は首を横に振って、もう会えないとジェスチャーする。

このままだ会っただけの日々は何にもならない、彼女はそう言うたげであった。

僕のことを思っていたことであつたに違いない。

僕は人魚姫の話思い出した。

でも、この場合は立場が逆のようだ。

僕が人魚になりたい程なのだ。

最後に、彼女は僕に美しい貝殻をプレゼントしてくれた。

それは今まで見たことのないような、宝石のような貝殻だった。

それ以来、その海岸で人魚の唄を聞く事はなくなった。

だけど星が煌く夜の海を見るたびに、もらった貝殻を見るたびに、

星夜の歌姫

あの美しい人魚とその歌声を、そして何より大切な思い出を、僕は鮮明に思い出すことができるのだった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2351c/>

星夜の歌姫

2009年3月24日09時42分発行